

3. ナイチンゲール看護学校の入学生の教育背景と19世紀英国の女性の教育

看護研究会 春日 広美

1860年開学のナイチンゲール看護学校の入学生の基礎教育背景を考察した。

開学当初の応募資格は、25歳～35歳の立派な人格の婦人であることのみであり、選考でも教育背景よりもそれが重視された。

見習い生の学力は、文字を書くにも努力が必要な者もいれば、参考書を買って、医学書や解剖学の本で自習し、薬びんのラテン語の勉強にも苦勞のない生徒もいた。教育背景はかなり格差があったことが窺える。

養成課程は看護婦見習い生課程と、レディ見習い生課程に分けられており、前者は主に労働者階級、後者は主に中流階級出身ではなかったかと考えられる。

労働者階級の初等教育には、日曜学校、助教法学校、おかみさん学校、普通学校がある。日曜学校以外を週日学校と言う。どの学校でも読み書きは教えるが、1861年の識字率統計で、自分の名前が書けない女性が34.7%おり、教育が徹底しているとは言えない。1851年の国勢調査で、週日学校に通う女子は10.8%にとどまっている。見習い生に文字を書くにも努力が必要な者がいるのは当然と言える。

中流階級の初等教育は家庭教育、寄宿学校、通学制学校、女子パブリックスクールがある。これらの共通の教育目標は、貴婦人の養成である。読み書き裁縫ができる程度から、複数箇所から長い年月にわたり教育を受け、すばらしい知識を持つ女性まで、教育レベルには差があるが、少なくとも読み書きには苦勞しなかった。

全体に教育された女性の割合が少なく、教育背景は、入学希望者の能力判定の材料とはなり得なかったと思われる。それは入学選考で、人格を重視した理由のひとつかもしれない。見習い生の学習能力には開きがあり、養成課程が2つに分けられたのも、学習能力別の意味もあったのかもしれない。